

2007年8月天津での国際学術研討会を思い出しています。

2023年4月14日のご仙逝以来、あまりにも多くお世話になってまいりましたことに心からの感謝を申し上げ、その重要なひとつに国際学術交流にご尽力いただき多大なる成果を挙げてこられたことに、改めて敬意の念を深くしております。

広くとれば日中関係の学術的相互理解と相互浸透性の重要性を1982年以来一貫して追求され、現代日本における中国認識形成にご奮闘されてこられたと実感しています。

2007年8月、南開大学歴史学院・大阪外国語大学中国文化論壇・台湾東華大学歴史学系・中国現代史学会の共催になる「現代中国社会変動と東亜格局・国際学術研討会」の開催に当たって、田中先生は日本側からの参加者約20名の報告集などの取りまとめを一身に背負って、南開大学・江沛先生との関係を基礎に国際シンポジウムを成功に導かれ、海峡兩岸からの約30名の参加者との学術交流の機会を得ることができました。南開大学・魏宏運先生や東華大学・張力先生のご挨拶など、今も明珠園一、二楼会議室を思い出しています。

各地域間の民間学術交流の展開として見ますと、すでに多くの地域間学術交流が進められる中で、天津と花蓮と大阪は初めての試みでしたが、その後田中先生の若き後継者諸兄弟のご努力によって今日に至るまで（Covid19の影響はなお残っていますが）継続的に国際シンポジウムを開催される基盤を構築されたわけです。こうした民間交流は国際相互理解を深めるうえで、さらには国際的諸問題をより広い基盤からとらえなおし、人類にとっての「平和」を考えるうえでますます重要な役割を担うものと思います。

田中先生の1982年以来の国際交流への情熱を振り返った時、間近にそのご活動を見る機会を得た一人として、その40余年にわたるご研究の広さと深さを改めて認識することができると実感しています。昨年10月の「近況報告」にありますように、新しいご著書の構想が具体化しつつあるという時にそのご容態の急変に、ただただ驚愕し今なおその現実を直視し得ぬ心理状態が続いております。

とうてい田中先生を偲ぶという感情にはありませんが、長年にわたりお世話になってまいりました一人として、またどこかでお目にかかれるのではないかと夢想しております。

かつて武昌黃鶴樓で長江を共に眺めしことを思い出しつつ、風高帆影疾 目送舟痕碧。

西村成雄 識 2023年7月11日夜